

---

# 聖職者と蒼い雷

蒼竜

---

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

## 注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

### 【小説タイトル】

聖職者と蒼い雷

### 【Nコード】

N7509P

### 【作者名】

蒼竜

### 【あらすじ】

戦国BASARA×Dグレ×ヘタリアの非夢混合です。

## 設定

この小説にはBL表現が含まれています。

【伊達総受け】が苦手な方・戦国BASARAやD・Gray-man、ヘタリアが苦手な方・非夢混合が苦手な方は速やかにご退場下さい。では設定です

戦国BASARA（以下戦BA）×D・Gray-man（以下Dグレ）×ヘタリア

舞台：Dグレ

主な登場人物：

Dグレ・・・全員

戦BA・・・伊達政宗

ヘタリア・・・日本一（本田菊）

出てくるたびに増やしますのでこれだけではありません。

性格などは基本原作通りに行きますー（多分・・・）

オリジナル設定

・伊達と日本は知り合いです。日本は現代の日本です。  
・武器は自分たちの武器です。イノセンスではないですがAKUMAを破壊することができます。

後に増える可能性は十分あるので注意してください

## 白い少年と竜の出会い

「えーつとコレとコレと……」

みなさんこんにちは、アレン・ウォーカーです。今僕は教団の近くにある街にきています。なぜこんな所にいるかというと、リナリーや科学班のみなさんからお使いを頼まれたからです。リナリーは科学班のみなさんの手伝いで、科学班のみなさんは仕事が忙しく……つてまあいつもなんですがそんなこんなでたまたま暇をもてあましていた僕がお使いを頼まれたというわけなんです。

「よしっ全部買いましたし、あとは教団に戻るだけですな。」

このごろはAKUMA退治で忙しくてなかなか街もみれなかったし良い機会でしたね。さあ早く教団に戻らないと。用事を済ませた僕は教団に早く戻ろうと足を速めたとき、AKUMAを感知することができた僕の左目が反応した。

「！――（AKUMAが近くにいます！？）どこだ！！」

左目が反応している場所は街のはずれにあり教団へと向かう秘密の通路がある森の中のようなのだ。AKUMAが教団内に入ってくことは滅多にないことだし、たとえば行って来られてもすぐに破壊は可能だ。でももしあの森の中に人がいたら……。

「っそうだとしたら危ないですね……！」

僕の左目はAKUMAにのみ反応するので、そこに人がいる可能性

は十分にある。それにAKUMAは人を殺して成長するのだから、森の中にいると言うことはおそらくその中にいる人をねらっているのだろ。そう考えた僕は荷物を道の隅に隠し、AKUMAがいるであろう森の中に飛び込んでいった。

\*\*\*\*\*

ハアハア・・・

「っクソッ！！いったい何なんだよありゃあ！！」

俺・・・伊達政宗は走りながらそう叫んだ。いや、いつもはcoolに決めるどんな奴でもこんな状況になると叫びたくなってしまう。なぜかって？決まってるだろう、そりゃあ・・・

丸い球体に顔がついててしかも銃を辺りにぶっ放しながら空を飛んで自分を追いかけてくるもんみたら誰だって叫びたくなるだろうよ！！

もちろん俺がこんな気味悪い謎の物体に引けをとるわけやねえんだが、よりによって今俺は丸腰、それに森の中で倒れてたところをいきなり襲われたんじゃないや。しかもいつやったのかはわからねえが利き手を怪我しちゃってた。こんな最悪の状況じゃ俺も為すすべがねえ。と言うわけで辺りを走り回ってたんだが・・・

「この着流し姿じゃちよいと走りにくいなっ・・・!!」

ああなんて俺は運が悪いんだよ畜生!! そんなことに氣をとられてた俺は、あの謎の物体が俺にねらいを定めていたことに気づけなかった。殺氣を感じて振り向いてみたがもう遅い。その時はもう謎の物体が銃を放っていた。持ち前の反射神経で弾に当たることはさけることはできたが、反応が遅かったため爆風に巻き込まれてそこら辺にあった木に頭をぶつけてしまった。

「つぐあつ!!・・・くそ!・・・」

頭を強く打ったことと血を流しすぎたことによつて俺の意識は朦朧としていた。何とか起きあがろうとしてみるが体が動かずすぐに倒れ込んでしまう。次第に目の前もぼやけてきた。

「（俺もココまでなのか・・・畜生・・・すまねえ・・・小十・・・ろ・う）」

そう柄にもなくあきらめかけていたその時、俺の視界に現れた【白の少年】。そいつは俺を追いかけていた物体から俺を守るかのように立っていた。俺はそいつに「逃げろ」と言おうとしたが、声に出ずそのまま俺の意識は闇に落ちていった。

闇に落ちる直前に俺はそいつがあゝの物体を破壊しているところを見た気がする。

## 白い少年と竜の出会い（後書き）

どうもみなさん初めまして。蒼竜です。

楽しんでいただけたでしょうか？第1話は。これから時間があるときはちびちび書いていこうと思いますのでみなさんよろしくお願ひします。途中までしか書いていないときもありますのでその際はきちんと前書きに表示します。では第2話でお会いしましょう・・・。

## 病室にて

「・・・・・・・・うう？・・・・ココどこだよ・・・」

俺が目が覚めて一番最初に見たのは真っ白い天井だった。あれ？おれよくわからねえ森で謎の物体に襲われたんじゃないかな？かな？ならなんでココにいるんだ？俺の頭からは疑問しか出てこない。

「（怪我の手当もされてるし・・・）」

俺が怪我したはずの頭には包帯が巻かれていた。またいつしたかわからなかった利き手の傷もきちんとしててくれた。ひとまずここら辺を見てまわるかと、bed から立ち上がろうとしたとき部屋のドアが開いた。

「あつ、よかった目が覚めたんですね。」

ドアを開けたのは14〜5ぐらいの白い髪をした特徴的な少年だった。俺はその白い髪を見て元親を思い出した。ああそっえばあいつも白だったよな。

「あのーほんとに大丈夫ですか？」

「ん？ああsorryちよつと考え事をしてな。ボーとしてた。」

「ならいいんですが・・・・。」

白い髪の少年はまだ少し心配そうな顔をしてた。そんなに俺変な顔

してたんだろうか？・・・ん？白い髪の少年？・・・あっ思い出した。あの時の少年じゃねえか！

「なああんた。アンタってもしかしてあの謎の物体を倒してた奴か？」

「えっ？ええそうですけど・・・覚えてるんですか？」

「Aゝまあうるおぼえだけだな。でも助けてくれてThank you」

「いえいえかまいませんよ。コレも仕事ですし。・・・結局怪我させてしまいましたし。」

「Ha！べつにかまいやしねえさ！んで・・・アンタ名はなんていうんだ？」

「僕はアレンウォーカーっていいいます。ここ黒の教団でエクソシストとして働いています。あなたは？」

「南蛮の奴みたい名だなあ。俺は伊達政宗だ。You see？」

「えーと・・・なんてよんだらいいですか？」

「A - 別になんでもいいぜ？」

「じゃあ政宗って呼びますね。」

「ああよろしくな、アレン。」

ひとまず自己紹介はすませた。いつまでもアンタっていうのは命の恩人に対して悪いからな。・・・あっそういえば。

「なあアレンココってどこだ？それにあの変な物体っていったい何なんだよ？？」

「ココは黒の教団と言ってさっきの物体・・・AKUMAを倒すための、いや世界の終焉を阻止するための組織なんです。」

「世界の終焉を阻止する？」

「はい。実は・・・。」

アレンは語り始めた。この組織の事、AKUMAの事そして

とを・・・。

## 千年伯爵とAKUMAの話

「まずはAKUMAのことから話しますね。AKUMAというのはよく本なんかで出てくる悪魔とは違い殺人兵器の名前です。」

「あの俺を追いかけてきた変な物体のことだろ？殺人兵器って……ずいぶんと物騒なもんだなあ。」

「はい、あの政宗を追いかけていたものことですよ。それでAKUMAというのは……元は人間なんですよ。」

「……なんだと……！」

あれが元人間だって！？政宗は我が耳を疑った。それはそうだろう。自分を追いかけてきたあの人間の形をしていないモノは元々は人間だったというのだから……。

「AKUMAは3つの材料【機械】【悲劇】【魂】がそろったとき【千年伯爵】が現れることで生まれるんです。そうですね……たとえば政宗の大切な人が亡くなったという仮定で話しましょうか。政宗は大切な人を不慮の事故でなくしたとします。この時点で一つの材料【悲劇】がそろっています。大切な人を亡くし嘆き悲しんでいるそんなときに千年伯爵はやってきて政宗にこういいます。「あなたの大切な人を蘇らせてあげましょうか？」ってね。」

「大切な人を蘇らせる……か。Ha！とんだ笑い話だな。死んだ人間が生き返ることなんてあり得ねえじゃねえか……。」

もしそんなことができるのならば多くの人間が大切な人を蘇らせて

いるだろう。しかしそれは不可能なことだ。人間のほとんどはこんな事分かり切っているだろう。しかし大切な人を亡くし精神が不安定な状態の時「蘇らせてあげよう」なんて甘い言葉をかけられたなら……。

「人間は精神が不安定な時何かにすがりたくなるものですから……。千年伯爵のそんな言葉にすがってしまうんですよ……。話を戻しますね？ 政宗はこの言葉にうなずいたとします。すると千年伯爵は人の骨だけの模型のようなものを取り出します。コレは【機械】でできているのでこの時点で2つの材料がそろいます。千年伯爵は政宗にこういいます。「コレに向かって大切な人の名前を言ったださイヴ」とね。政宗がその人の名前を呼ぶと模型にその大切な人の【魂】がはいります。コレによって3つの材料がそろいましたね？……。AKUMAの完成です。模型にはいった魂は政宗を殺しにかかります。」

「！？……。なんで俺を殺しにかかるんだよ？ 俺の大切な人なら俺を殺すわけねえじゃねえか。」

「その模型に入ってしまった【魂】は千年伯爵の操り人形になってしまふんです。操り人形になってしまった【魂】は自分の意志にかかわらず人を殺さないといけないんです……。政宗を殺した模型は政宗の体に入り政宗の【皮】をかぶり人間の社会に潜り込み人を殺していくんです……。」

「なるほど、あとはその繰り返しでどんどんAKUMAが増えていき悲劇が増えていくって寸法か……。」

アレンはそこまで言うと言ったん閉じた。政宗はその話を聞いて怒りを覚えていた。なぜ大切な人を殺さないといけないんだろう

か。ただもう一度だけ大切な人と一緒にいたいという気持ちを利用する千年伯爵……。ゆるせねえと政宗は思った。

「ってことは千年伯爵がさっきいつてた世界の終焉とやらを起こそうとしてるのか？そのAKUMAを使つてよ。」

「はい、そうです。その千年伯爵の陰謀を阻止するための組織がここ黒の教団なんですよ。そしてそこでAKUMAを倒すために活動しているのが僕たち【エクソシスト】なんです。」

「エクソシストってなんだ？」

「エクソシストって言うのはAKUMAを唯一破壊することのできる物質【イノセンス】の適合者のことです。イノセンスは109コしかないためエクソシストになれるのも109人しかいないんです。」

「

「そいつあ厳しい状況じゃねえか。そのイノセンスとやらには適合者がいるんだろう？こんなひねえ世界から109人見つけたすのは厳しいんじゃないのか？……。死んじまう奴もいるだろうし。」

「はい、ほんと厳しい状況なんですよねえ。それにイノセンスは千年伯爵にもねらわれているんです。つまり千年伯爵と人間どちらが先にイノセンスを見つけたことができるかにかかっているんですよ。」

「Hunなるほどな。Thank youなアレン。そんな長い話させてしまつて。」

「かまいませんよ。……じゃあ僕の方からも聞いて良いですか？」

「Ha! かまわねえぜ。」

「えーとじゃあ政宗はどこから来たんですか？見たところ・・・イギリス人ではなさそうですね。」

「（イギリス人・・・？）ああ俺は日本人だぜ？」

「ええ！日本人なんですか！！」

「なんでそんなに驚いてんだ？」

「だって日本と言えば今はAKUMAの住処であり千年伯爵の拠点になってる所ですよ？よく無事でしたね。」

「なんだと？！うそだろう！？」

政宗はアレンの言葉にびつくりした。日本が千年伯爵の拠点になってるだど・・・。そもそもAKUMAなんかの話からしておかしいと思っていた。日本は外国との貿易があまりないし積極的にやってるのは自分の所くらいだと思っていた。いくら接触が少ないとはいえそんな世界をも巻き込むような話少しくらいこちらに流れてきても良いようなもの。それに国内でもそんな変なモノに襲われたなんて話聞いたこともない。この話からすると考えられるのは・・・。

「なあアレン今って何世紀だ？」

「？今は19世紀ですよ？」

「嘘だろう・・・。」

「?どうしたんですか」

どうやら自分は未来に来てしまったらしい。政宗は頭を抱えなくなったがアレンがいるのでやめた。・未来なら俺の帰る場所もねえじゃねえか。どうするよおれ。いきなり考え込んでしまった政宗を見たアレンは首を傾げた。まあ目の前にいる者が過去の人間だなんて夢にも思わないだろう。しばし考え込んだ政宗はふと顔を上げアレンを見た。そしてアレンに向かって

「・・・悪いがココにおいてくれねえか？」

といった。ついでにココの責任者もできれば読んできてほしいと頼んだ。アレンがどうして?と言う顔をしていたので、ひとまずありがちな嘘をついておいた。命の恩人であるアレンに嘘をつくのはためらわれたがまあ話が話だ。背に腹は代えられねえ。そう思い黙っておいた。それに言ったらただでさえ何かを抱えている様子のアレンにさらに重荷を積ませることになりかねない。それだけは絶対に避けたい政宗はひとまずココの責任者に事情をある程度話して、できればココに置いてもらおうと考えたのだった。そんなに簡単にいかねえとも思ったが他に方法はない。

「おれどうなるんだろうな、ハア・・・先が思いやられるな。」

そう言いながら政宗はアレンの出ていったドアを見つめていた

## コムリン暴走

「……っというわけなんだが。」

「へえそれはそれは。大変だったねえ君も。」

俺はアレンによんできてもらった黒の教団「」の最高責任者のコムイとやらに俺の身の上を――（一国の主であることとBASARA技とかのことは抜いといたが）話していた。ちなみにアレンは任務らしく今はいない。話し終わったあとのアイツの反応は結構薄かった。と言つか軽かった。というわけで俺をココにおいてくれるか？と聞いてみたらすんなりOKがもらえた。どうやら俺が頭打って気絶してたときにすでにAKUMAではないかどうかをチェックしてたらしい。意外としっかりしてるんだなあ。

「おくのはかまわないんだけどねえーさすがに政宗君のその事情を話すわけにはいかないでしょ？だから何らかの仕事についてもらわないといけないんだけど……それでも良いかい？」

「Aゝ俺はべつにかまわねえさ。置いてもらえるんだからなんかしないとなーとは思ってたしな。むしろ好都合だ。」

「なら……君には科学班の手伝いをしてもらおうかな。いやー書類の整理が全くできてなくてあしの踏み場もないんだよねー今。」

「OK 科学班だな。っとなつえばココの中のことしれねえんだよな。どうすつかない。」

「だったらアレン君が帰ってきたら一緒に見て回ったらどうかい？  
アレンもまだココに来たばかりだしね。」

「へーアレンもココに来たばかりだったんだなあ。じゃあそうすっ  
かな」

「じゃあ着替えとココの地図おいとくから着替え終わったら来てく  
れるかい？」

「OK わかった。」

そう言い残してアイツは部屋を出ていった。俺はひとまず言われた  
とおりに着替えを済ました。一（白衣とかいうやつもおいてあった  
ので一応着た）部屋を出ようとすると婦長が声をかけてきた。どう  
やら体調確認をするらしい。簡単な質問を受けて、問題なしのお言  
葉をもらってから部屋を出た。俺は地図を見ながら科学班のフロア  
までなんとかたどりついた。っていうかココ広すぎるだろう。あや  
うく迷うところだったぜ。一（実際は少し迷った）あーそういえば  
ここに来る途中すれ違った奴等がすれ違いざまに俺の方を振り返っ  
てきてたんだが……。あれはなんだったんだ？やっぱり見慣れな  
いおれをみたからなのかね。まっ気にすることでもねーな。

「ここであつてるよな科学班のフロアって。・・・あっしまった！  
すっかり忘れてたが俺の刀あの森に落ちてたかどうかアレンに次ぎ  
会ったとき聞かないといけなかったんじゃないか。」

なんでこんな時に思い出すかね俺。まああとでも良いか。そんな  
ことを考えながら俺は科学班のいるであろう扉の中に入っていた。  
一（このとき扉が独りでに開いたのを見てびっくりした。さすがは  
未来）

「・・・・・・・・なんだこれ。」

俺が科学班の部屋ではじめに見たのは書類の山とその中で死にかかっている白衣を着た奴等だった。「俺残業しなくて済むなら死んでも良いやー」なんて言ってる奴もいる。どんだけ大変なんだよ科学班。おれここでやっていけるか？

「あれ？あなた昨日アレン君に運ばれてた人ね。怪我はもう大丈夫？」

「ああもう大丈夫とは言われたぜ？」

「そうよかった。・・・白衣を着てるって事は兄さんが言ってた新しく来る人ってあなたのこと？」

「・・・・・・・・まあたぶんそうだが。」

「そうなんだ。私はエクソシストと科学班の手伝いをしているリナリーよ。よろしくね。」

「A - 伊達政宗だ。ココで手伝いをするようにコムイに言われたんだが・・・っていうか兄さんってコムイのことか？」

「ええ。私とコムイは兄弟なのよ。だから兄さんってよんでの。」

「へーそうなんだ「おいみんなおきてるー??」・・・人の言葉さえぎんじゃないよー!!」

「ああ政宗君か。ゴメンゴメン。やっとコムリンが完成したんでう

かれてたよ。」

「兄さんコムリンって？」

「よくぞ聞いてくれたぞ！リナリー！コムリンは僕の頭脳と人格を完全にコピーしたイノセンス開発専用の万能ロボットさ、あらゆる資料の解析はもちろん対AKUMA武器の修理、適合者のケアサポートも行っただ。まさにもう一人の僕！コレで仕事が楽になるぞ――！！！」

「……しっ……室長おーーーーー！！！！！！！！」

「HA！すげーじゃねーか。頭はよかつたんだな。」

「一言多いぞー政宗君。ってあれ？リナリーどうしたんだい？」

「ねえ兄さんコムリンってコーヒー飲めるの？」

「あはははは。何を言っているんだリナリー。いくらコムリンが僕にそっくりって言ってもコムリンはロボットだよ？コーヒーは……  
……飲んだの??」

ドンツツツツ

コーヒーを飲んだコムリンはいきなり暴走し始めた。暴走し始めたコムリンはリナリーに麻酔を撃ち眠らせてしまった。それを見たコムイは「リナリーーーーーー！！！！」とさけんでいた。  
俺はひとまずリナリーのそばに行きいつ何が起きても言いように戦闘態勢に入った。さすがに女を見捨てるわけにはいかねーだろ？

『私・・・は・・・コム・・・リン。エクソシスト・・・強く・・・する。この女・・・はエクソ・・・シスト。』

『この女をマッチョに改良手術するべし!!』

「「「「「なに——————!!」」」」」

ドギヤアアアアアアン!!

「ギヤ————!!」 「コムリン————!!」

「おいおいこいつはやベーぞ・・・。」

俺はリナリーを抱え上げ走り出した。コムリンは俺の後を追いかけてくる。よこにはなんかしらねーが佐助に少し似た頭をした男が一緒に走っている。ああ・・・

「なんでこんごろ俺追いかけてばっかりなんだよクソオオオオオオオオオオオオ!!」

そうしてコムリンとの追いかけっこが始まった。

## コムリン事件終結

ハアハア・・・

「くっそまだ追いかけてくんのかよー!」

「えーと政宗・・・だったかひとまず地下水路の所に行くぞ!」

「どこだよそこ。と言うかアンタ誰だ!」

「俺はリーバーだ!詳しいことはあとで話す。今は地下水路に行くぞー!!!ついてこい!!!」

「OK しつかり案内してくれよ。」

佐助似の頭をした男・・・リーバーはそう言っ角を曲がっていった。俺はそれに着いていく。その角には階段があった。この下に地下水路があるようだ。階段の幅は狭いためコムリンは通れない。時間稼ぎにはなるだろう。階段を下りていく俺達・・・5分くらい階段を下りていると明かりが見えてきた。どうやら水路についたらしい。

「やっと水路だ・・・。ああ疲れた。」

「だらしねえな。」

「うるせー。俺は科学班だ。運動することはあんまりないからすぐ疲れるんだよ。ほっとけ。」

「あれ政宗？リーバーさんもどうしてココに・・・？それにリナリーはどうしたんですか。」

「！アレンかえってきたのか！」

水路についた俺達を待っていたのはファインダーとかいう奴とアレンだった。（ちなみにファインダーの名前はトマっていうらしい。あとで聞いたが。）俺とリーバーはアレン達に先ほど会ったことを手短に話した。話を聞き終わったアレン達は「アホくさっ・・・」って顔をしていた。そりゃそうだ。あっそういえば・・・

「アレン俺が倒れてた森の中で6つの刀見なかったか？」

「いやみてないですね。あの時はAKUMAを早く倒すために足元なんか見てなかったから・・・。」

「そうか・・・。」

まいったな！。刀さえあればコムリンなんざ一発で倒せるっつーのに・・・あれ？どっから血のにおいがするな。アレンからか？

「アレンお前どっか怪我してないか？」

「！！なんでわかったんですか！？。」

「アレンの方から血のにおいがしたんでな。もしかしてと思って・・・大丈夫か？」

「ええまあ・・・ご心配おかけしてすみません。」

「きにすんな。俺が勝手に気にしただけだから。」

俺がそう言ったらアレンはなんかしらんが顔が赤くなってた。ほんと大丈夫かなアイツ？言われなれてないとか？俺が不思議に思ってたときいきなり爆発音と共に砂煙が立ちこめた。どうやらアイツが来たらしい。

「ツチ、また来やがった。オイ上に上がるぞ！全員走れ！！」

俺がそう合図するとみんな一斉に階段を上り始めた。俺も階段を上がっていく。さっきより早く階段を抜けることができた俺達は急いで上へ上へと螺旋の廊下を上っていく。俺は途中で木刀が立てかけられているのを見つけた。役不足だがないよりはマシだ。俺はその木刀を開いてる手で掴んでみんなのあとに続く。「おい無事か！！」と言う声がよこから聞こえてきた。横を見ると科学班の奴等が空飛ぶ円盤みたいなのにつて手を振っていた。

「室長！みんな！！」

「班長早くこっちへ！！」 「あっアレンとトマ帰ってたの？こっちに來い！早く・・・」

「政宗も早く・・・！！」 「リナリィーまだスリムかいーーーーー！！！！！！！！！！」

「アンタ等落ち着け・・・。」 「落ち着けお前等・・・。」

科学班とコムイの騒ぎっぷりに俺とリーバーは少し呆れた。俺はその光景を見て伊達軍の奴らを思いだした。大丈夫かなアイツ等。

ドガアアアアアアアン！！

「うわぁ来たぁー！！」

そうこうしてるうちにコムリンが追いついてきた。横をチラツと見ると空飛ぶ円盤からばかでかい大筒が出て来やがった。「科学班インテリなめんなよぉー！」という声が聞こえる。どうやらコムリンに当てるきらしい。助かったと思ったのもつかのま。あの馬鹿コムイが操縦してる奴に襲いかかって攻撃が変なところに当たり始めた。

「どわわわわっ」

俺達は必死で避ける。（まあおれはこんな状況になったことがあったからまだアイツらよりは慣れてるが）

「何やってんだお前等ー！！」

アイツ等の中で起こった騒動を見てなかったリーバーはそう叫んだ。その問いかけに「は反逆者がいて・・・。」と誰かが答えてた。おそらくコムイだ。と言うか絶対。

「グスッコムリン・・・アレン君の対AKUMA武器が損傷してるんだって治してあげてなさい。」

「えゝ？？（汗）」

『損ケ・・・傷ガ・・・』

『優先順位変更！アレンウォーカー重傷により最優先に処置するべし！ー！』

そう言ったコムリンはアレンの足を掴んでアレンを捕まえた。

「わっ！！」

「「アレン！！！！」」

『アレンを手術室へ連行！！！！！！！！』

「ぎゃああああああ！！何あの入り口！！」

アレンはめちゃくちゃ叫んでる。コムイの野郎何しやがんだ！！

「さぁリーバー班長、政宗君！！コムリンがえさに食いついてるスキにリナリーをこつちに！！」

「「アンタどこまで鬼畜なんだ！！」」

そんなことをしているうちにアレンはどんどんコムリンに近づいていつている。小さいコムイの形をしたからくりが『手術』手術』とにかく手術』』と言いながらアレンを待ちかまえている。（その手にのこぎりやらなんやらが見えているのはきつと気のせいではないだろう）アレンはその光景にさすがに耐えきれなかったのだろう。話に聞いていた【イノセンス】を発動していた。それは銃の形？をしていた。（？がついているのは俺の知っている銃の形じゃなかったからあってんのか不安になったからだ）

「おお新しい対AKUMA武器！！」とリーバーが叫んでいたからおそらく元々の形はあれじゃないんだなあと学んだ。こんな状況でこんな事考えるなんておかしいんだろうが、もういろいろありすぎてなれてしまった。俺の所もココに似たようなもんだしな。アレン

は【イノセンス】でコムリンを破壊しようとしていたが、「ふにやら？」とか叫んでイノセンスの発動をといってしまった。

「！オイアレン！どうしたんだ！？」

様子がおかしいアレンに俺はそうさげんだ。アレンは「し・し・びれるるゝ（汗）」と言いながら倒れてしまった。その様子を見たり・バーとファインダー（トマ）が「アレンーーーーー！！」「ウオーカー殿ーーーーー！！」と叫んでいた。そのあとにリーバーが科学班のいる方に向けて「室長おーーーーー！！！」と怒鳴っていた。科学班にいるコムイが吹き矢を使ってアレンをしびれさせたらしい。

「何やってんだコムイーーーーー！！！」

「だってあんなの撃たれたらコムリンが・・・コムリンが・・・っ！！！」

どうやらアレンに吹き矢を使ったのは新しい対AKUMA武器であるあの銃に撃たれたらコムリンが再起不能に陥ってしまうかららしい。その発言を聞いたと同時に

プチッ

つと俺の中の何かがキレた。

「オイリーバー。ちょっとリナリー守っとけ。・・・アイツの息の根止めてくる。」

「えっちょっ政宗・・・？」

俺はリーバーにアレンとリナリーを任せ、科学班のいる空飛ぶ円盤

に向かつてとんでいった。・・・もちろん木刀を持って。リーバー達は俺がそんな行動ををすると思っていなかったのかそれともこのジヤンプに驚いているのかは知らないが俺に視線を向けている。俺はスタツツと空飛ぶ円盤に着地した。少しは揺れるかと思っていたが意外と揺れなかった。俺はつかつかとコムイの元に歩み寄った。そばにいた科学班の奴等は俺が通る道をあけてくれた。いや、俺の漂わせる殺気に当てられただけでもな。コムイにあと何？かつていうところで俺は足を止めた。コムイは汗をかきながら俺を見ている（おそらく冷や汗だろう）

「まっ政宗君どうしたんだいそんな怖い顔して。せつかくのきれいな顔が台無しだよ（汗）」

「なあコムイ。お前に選択肢をくれてやるよ。どっちか答えろよ。」

1 雷を直でくらう

2 木刀で死なない、馬鹿にならない程度で殴られる

さあどっ

ちがいい？」

「えーと・・・どっちもいやなんだけど・・・」

「OK わかった。答えなかったから3 雷+木刀で死なない、馬鹿にならない程度で殴られるに決定だ。」

パリッ・バチバチッ 俺は木刀に雷をまとわせた。コムイは雷のことは冗談と思ってたらしい。（まあ教えてなかったし）俺の方に手を向けて必死に止めようとしていた。残念だったな、お前の行いが悪かったんだ。

「えっうそまじで勘弁してください！！（泣）」

「問答無用。・・・good night コムイ。」

ゴスッ・バチバチバチッ！！「ぐはあ！！！」

俺の雷＋木刀攻撃を受けたコムイは黒こげになりながらその場に倒れ込んだ。

「A・すつきりしたぜ！」

パチパチパチッ と周りから拍手が送られてきた。俺は周りの奴にコムイの奴を縄か何かで頑丈に縛っておくように頼み、再びコムリンやリーバー達がいる方に飛んでいった。

「Hey リーバー悪かったな。1人で任せちまって。」

「いやそれはまあいいんだがお前すごいんだな・・・。」

「そうか？まあその話はあとにしてはやくコムリンをたおさねえと・・・ってあれ？リーバー、リナリーは？」

「あつ？・・・あああそこだ。ほらあの大砲の所。」

リーバーが指さした所に目を向けるとそこにはリナリーがいた。ああほんとだ、いた。寝起きだからリナリーはボーとしていた。彼女のつぶやきを聞く限りアレンの声で目覚めたらしい。リナリーは【イノセンス】を発動させ、コムリンに向かっていった。コムリンがリナリーに攻撃するがリナリーはヒラリヒラリと胡蝶のように舞

い攻撃を交わしていく。その攻撃で俺達のいたところが破壊され足場が崩れてしまったためリーバーの手を引きながら（このときリーバーの顔が若干赤くなっていたような気がするの俺の気のせいかな？）俺は再び飛び、落ちてくる瓦礫を使ってリーバーの手を引きながら円盤の方へと飛んでいった。さすがに大の大人を抱えて飛ぶのは難しい・・・ってか無理なんだな。円盤について俺はリーバーを置いてトマを助けに行こうと思ったがリーバーに止められた。コムリンはリナリーの【イノセンス】黒い靴で破壊された。（正確に言うところムイと共に下に落ちていった）アレンはトマによって何とか救出されていた。アレンは包帯でグルグル巻きにされていた。

「よかった・・・アレンとトマは無事か。」

「アレンはミイラ男みたいになってるけどな。」

「A - まあ無事だし良いんじゃないの？」

こうして【コムリン暴走事件】は幕を閉じたのだった。

\*\*\*\*\*

トンテンカン トンテンカン・・・

「ん・・・」

僕はその音と額の冷たい感覚で目を覚ました。あれ僕何してたんだっけ・・・。たしか教団に帰ってきて政宗とリーバーさんとリナリーにあって、コムリンが追いかけてきてそれで・・・。

「！！」

「わっ！びっくりした。」

「あれリナリー・・・？」

「よかった！ごめんね兄さんの発明のせいで・・・」

まだしびれる？と聞いてきたリナリーに僕は大丈夫ですと答えた。

「ココは・・・？」

「科学班の（みんなの）研究室。場内の修理でみんな出払っちゃってるけど・・・。」

「政宗は？」

「政宗はみんなの手伝いしてるの。彼身軽だから、みんなに仕事頼まれて忙しそうにしてるわ。」

大変そうだったからあとで差し入れ持って行ってあげなきゃね。とリナリーはいった。

「あつあとコレコートに入ってた。」

「あつイノセンス！よかった壊れてなくて・・・。」

「ヘブラスカの所に持っていけば保護してくれるよ。」

「お帰りアレン君」

「た、ただいま・・・。」（かわいいな）

リナリーのその言葉に少しポットとしていた僕の耳に政宗の疲れたような声が聞こえてきた。

「ちょっとは休憩させてくれよ」

「ダメよ、政宗ちゃんは私たちができないような所を直しにいけるんだから、人より倍働いてもらわないと！」

「NOOOOOOOOOOO!!!!」

「？政宗どうしたんですか？」

叫んでる政宗にリナリーと一緒に駆けつけた僕はそう問いかけた。

「ああアレンか・・・。聞いてくれよ、ジェリーやリーバー達が休ませてくれねーんだよ。一応けが人だったんだぜ俺？」

「いいじゃねえか、そんなだけ頼られてるって事だろう？政宗は俺達より若いし、身軽だし、体力あるしさ。」

「そうだけだよ・・・。」

と政宗は他の教団のみんなとしゃべっていた。ちょっと不機嫌そうな顔をしていたけど実際はうれしそうだった。その姿を見て僕の胸は一瞬ズキンと痛んだ。一瞬痛んだ胸に疑問を感じた僕だったけど気のせいだろうと考えることにした。

「あつそうだった！アレンに言い忘れてたことがあったな。」

「僕にですか？」

「そうだぜ。なあ？」

「ああそうだった。コムリンのせいでいえてなかったな。」

「…………お帰りアレン」「…………」

リーバーさんの声を合図にみんなが僕にお帰りと言ってくれた。みんな僕の方を見て笑っている。政宗はみんなみたいには笑ってなかったけどふわりとほほえんでいた。リナリーは僕の後ろでニコニコと笑顔をこぼしていた。僕はみんなの笑顔を見てうれしくなった。

「…………ただいま！…………」

マナ、師匠。僕はみんなの笑顔とAKUMA達の魂を救うため僕は教団でみんなと一緒に頑張っていこうと思います。僕は心の中でそう誓い、みんなの手伝いをするためにリナリーと一緒にリーバーさんや政宗達のいるところへと向かっていった。ヘbrasカの所へはあとで行こうと思う。

## 刀探しと神田との出会い

「んじゃちよっくら行ってくるわ。」

「気をつけてくださいね。政宗。」

「心配すんなって。じゃあまたあとでな。」

アレンとの会話を終えた俺は、地下水路に向かった。俺の武器【六爪】を探しに最初に俺がいた森に行くためだ。森にいるのに気づく前どこで何をしていたのかはあやふやなんだが、その時六爪を所持していただけは覚えていた。この記憶が正しいならば六爪もココに来ているはず・・・という仮説を立てた俺は早速コムイに休みをもらい、森に探しに行こうとなった。思い立ったら即行動しねえとな。地下水路についた俺はそこにいた奴に話しかけ船を出してもらい、森の近くにまで行ってもらった。森に着くまでの時間は周りの景色を見ていたらあつという間に過ぎていった。奥州・・・いや日の本にもないような珍しいもんがあつたしな。

「ありがとな！」

そうお礼を言うと船を出してくれた奴は軽く頭を下げ、再び来た道に戻っていった。

「さて、森に向かうとするか。」

船を見送ったあと俺は森に向かい歩き始めた。といっても5分も歩けばつくようなとこなんだが。

\*\*\*\*\*

「Shit! まったくみつかんねえ。ぜってーあると思ってたんだが・・・。」

森に着いた俺は早速六爪探しを始めたんだが、1時間以上たった今も手がかりすらつかめてない。やっぱり来てないのか・・・と思い始めたおれだったが、ふと人の気配がするのに気づきその考えをいったんStopした。

「Aa」だれか森ん中にいるのか？」

こんな何もない森の中にいたい何しに来たんだ?・・・まさかAKUMAか? まいったなー今武器もねえし対抗する術もねえな。A- どうしよう。ってあれ? コレ前もなかったか?

どんどん脱線していく俺の思考。このまま考えていたらもつと脱線しそうなのでいったん考えることはやめにした。殺気もねえし、大丈夫だろう。そう言い聞かせて。

ガササツ「・・・何もんだテメエ。」

現れた人物は長髪で黒い服を着たただの人間だった。しかもその服はよく見るとエクソシストの物だった。よかったと安心したのもつ

かの間そいつが持っている物に気づいた俺は驚いた。そいつの持っていた物は俺の探していた六爪そのものだったのだから。

「H e yアンタ！それどこで拾ったんだ？」

「・・・先に俺の質問に答える。答えねえんなら教えねえよ。」

「O h s o r r y！俺は伊達政宗つてもんだ。わけあって黒の教団で世話になってる。よろしくなエクソシストさんよ。」

「テメエがコムイの行つてた奴が。・・・俺は神田ユウ。コイツはさつき森の中で拾っただけだ。」

「なら神田、悪いがそいつを返しちゃくれねえか？それは俺の武器なんだよ。」

「テメエは刀を六本も使うのか？」

「ああまあな。見たところアンタも剣士のようだな。今度手合わせしようぜ。」

「・・・気が向いたらな。」ヒュッ

パシッ「おっと！・・・T h a n k y o u 神田。」

神田から六爪を返してもらうことができた。・・・しかし二つ同時に投げてくんなよ。結構重いんだぞコレ。しかしやっぱり武器があると落ち着くな。この重さも久しぶりだ。刀を1つ鞘から抜き、軽く振ってみたりしたが、特に異常はなさそうだった。刀を鞘に戻し、体を神田の方へ向け帰ろうかと言おうとしたとき、俺は何かを感じ

じ取った。いつも戦場で感じる殺気とは違ってもっとタチの悪い感じ・  
・。そうAKUMAを見たあの時の感じだ。俺は鞘に戻した刀を  
再び抜いた。神田は俺のその行動に疑問を感じたらしく怪訝そうな  
顔をしていた。どうやら神田はAKUMAが来ていることに気づい  
ていないようだ。

「オイ神田。イノセンスを発動させてくれ。」

「何でイノセンスを・・・っ!!」

どうやら神田も気づいたようだ。

「敵さんが来るみてえだぜ？」

「数は5・6体つてところか。・・・お前戦えんのか。」

「攻撃が通用するか・・・を抜いたら十分戦えるぜ。自分の身は自  
分で守るからアンタは気にせず行け。・・・来るぞ!!」

俺の声と同時にAKUMAが飛び出してきた。数は6体。十分戦え  
る数だった。俺は周りに気を配りながら慎重に1体と対峙する。先  
に仕掛けてきたのはAKUMAの方だった。奴は銃を使って俺をし  
とめようとする。俺はそれを難なくかわす。奴が攻撃をやめた瞬間  
俺は奴の頭上に飛び、一刀両断にした。キレる感覚がしたのでおそ  
らく自分の攻撃は相手に通用したはずだ。案の定奴は俺が切ったあ  
と二つに割れ地面に落ち、そして爆発した。攻撃が通用することが  
わかった今、相手の攻撃を伺わなくて済むようになった。俺は1体  
1体を切っていく。神田も神田でどんどん敵を切っていたためA  
KUMAは10分も立たないうちに全滅していった。

「おいおいもう終わりか。やっぱり武器があるとコイツらよえーな。」

「お前エクソシストだったのか？」

神田は俺にそう問いかけてきた。ああそういえばアレンが言ってたな。AKUMAを倒せるのはイノセンスを持ったエクソシストだけだつて。でも俺の六爪は別にそんなじゃねえしなー。

「わかんねーけどたぶん違うと思うぞ。」

「AKUMAを倒せるのはイノセンスだけだ。」

「そうなんだが、まあこつちにも事情があんだよ。聞きたかったらコムイにでも聞いときな。」

「……ツチ」

「舌打ちすんなよ。まあいずれ教えてやるさ。かえろうぜ？黒の教団<sup>イム</sup>によ。」

「……わかったよ。」

神田はそう言うすとすたと俺を置いて歩いていった。俺はやれやれと思いつながらその後を追いかけた。……いや帰り道がわかんねえからさ。ついていかねえと。

## 刀探しと神田との出会い（後書き）

こんにちは、お久しぶりです皆様。更新が今までできずにすみませんでした。学校とか学校とか部活とかがあつてなかなか更新ができなかったんです。多分これからこの調子が続くと思います。楽しみにしている方（いるのかな？）がいらっしゃるかもしれません。気が長に待っていてください。

## PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能<sup>たんのう</sup>してください。

---

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。  
<http://ncode.syosetu.com/n7509p/>

---

聖職者と蒼い雷

2011年4月10日01時36分発行